居住者の記憶をもとにした 1960年代における団地暮らし の記録

—千里ニュータウンを事例として—

A STUDY ON THE DANCHI LIFE IN THE 1960s BASED ON MEMORIES OF FIRST-GENERATION PEOPLE

— A case study of Senri New Town —

瓜生朋恵 ——— * 1 梶木典子 ——— * 2
上野勝代 ——— * 3

Tomoe URIU ——— * 1 Noriko KAJIKI ——— * 2
Katsuyo UENO ——— * 3

キーワード：
暮らし、団地、高度経済成長、千里ニュータウン、住宅模型

Keywords:
Life, Danchi, Rapid economic growth, Senri New Town, Dwelling models

This study aims to collect memories of Danchi life about the first-generation people in Senri New Town. The results are as follows; 1) We figured out the typical Danchi life in the 1960s through interviews. 2) The first-generation people took the new lifestyle regardless of whether the floor plan of the apartment fitted or not. Therefore, some troubles were occurred in the apartment. However, they dealt with their troubles and they enjoyed their Danchi life. 3) We were also able to hear variety of Danchi life episodes in the 1960s.

1. はじめに

未来の生活者が豊かな住居観や住意識を育むためには、これまでの住宅・住生活の変遷を継続的に記録し、継承していくことが重要である。しかしながら、日々の暮らしは、日常的であるため、一般に記録として残されることは少ない。

日本の住宅史の「近・現代」において、1950年代半ばから始まった高度経済成長は、住宅の建設・供給システムだけでなく、住生活や生活文化にまで及ぶ「産業化」を生み出した。1958年、大阪府では千里ニュータウン(以下、千里NTと記す)の建設が始まり、NT内には公共賃貸住宅団地が数多く建設された。団地の間取りは「食寝分離」の概念のもとnDKプランが採用され、住様式の洋風化が進行し、数多くの若年世帯が新たな文化的生活に憧れを抱き入居した。

現在日本各地のNTは、建物の老朽化や急速な少子高齢化などが課題となり、「オールドタウン」と揶揄されるまでに至る。開設から50年が経過した千里NTにおいては、一部地域において建て替え事業が推進され、若い世代の新しい住民が増加傾向にある。一方、建て替えに伴う急激な都市景観の変化や住民の世代交代は、それまでの住生活や住文化を消失させる恐れがある。

1960年代の団地暮らしに関する既往研究には、鈴木¹⁾らの耐久消費財、就寝様式に着目した報告、広原²⁾³⁾らの「団らん」行為に着目した報告などがある。前者は住み方調査により団地住戸内における家具・モノの配置と領域構成の傾向を、後者はアンケート調査により「団らん」を代表する行動、及びその行動と居室との関係性を明らかにしたが、これらはいずれも開発当初から数年以内に実施された調査である。開発から年月を経た現在、居住者に改めてかつての団地暮らしについて尋ねた研究はみられない。

そこで、本研究は、住宅・住生活の変革期にあたる1960年代に着

目し、千里NTの団地居住者から暮らしの記憶を収集することで、これらの団地における暮らしを新たに記録することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究の方法は、まず入居開始当初の暮らしの記憶収集のため①聞き取り調査、②住み方調査をした。次に、さらに多くの暮らしを記録するため、①、②の結果をもとに暮らしを詳細に再現した模型(縮尺15/100)^{注1)}を製作、展示し、③模型を回想のためのツールとして用い、暮らしの記憶を聞き取った。①、②を1次調査、③を2次調査とする(表1)。なお、本研究の取り組み^{注2)}は、2012年10月に開催された吹田市立博物館秋季特別展「ニュータウン半世紀展—千里発・DREAM—」^{注3)}の一環として実施した。

1次調査対象者は、千里NT開設から5年以内に入居したNT第一世代^{注4)}とし、1960年代の団地暮らしの記憶を調査員が直接聞き取った。回答は、サラリーマン家庭であった8世帯から得られた。住み方調査^{注5)}は、男性の回答者では住戸内における暮らしの記憶が曖昧だったため、女性の回答のみを抽出した(ケースDからは回答が得られなかった)。1次調査では回答者が過去を回想しやすいよう、当時の暮らしが記された文献⁴⁾を示しながら、実施した。また、回答者に当時の写真の提供を依頼したところ、ケースE、Fの協力が得られた。

2次調査を実施するにあたり、1次調査の結果をもとに暮らし再現模型を製作した。模型製作のために、解体前の初期の団地において住戸内部の実測調査もした。これら調査の結果をもとに、可能な限り忠実に、詳細に1960年代の団地暮らしを模型によって再現した(図1)。

2次調査は、1次調査の結果をもとに製作した2種類(府営団地、

¹⁾ 神戸女子大学家政学部 助手
(〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山2-1)

²⁾ 神戸女子大学家政学部 教授・博士(学術)

³⁾ 神戸女子大学家政学部 教授・学博

¹⁾ Research Assoc., Division of Home Economics, Kobe Women's Univ.

²⁾ Prof., Division of Home Economics, Kobe Women's Univ., Ph. D.

³⁾ Prof., Division of Home Economics, Kobe Women's Univ., Ph. D.

公社団地)の暮らし再現模型を用い、博物館展示室で実施した。展示中、製作者が展示室に常駐し、模型を解説するとともに、来館者から模型に関する意見を聞き出し、随時記録した^{注6)}。その中から暮らしの記憶を抽出したところ、90件の回答が得られた^{注7)}。

本研究では、1次調査と2次調査の2種類の調査手法を用いて、団地暮らしの記憶を収集した。調査はいずれも団地暮らしの記憶の収集を目的として実施したため、本報では、両調査の結果を合わせ、千里NTの1960年代における団地暮らしの記録として報告する。

3. 1次調査回答者の基本属性と入居経緯

1次調査回答者の基本属性は、表2のとおり。特徴としては、最終的な子どもの人数は2人の世帯が多いこと(7件/8件中)、入居時の年齢はいずれも20代～30代前半であること、入居時の妻の就労状況は、結婚や妊娠を機に退職した無職が多いことであった(ケースEも入居時は就労していたが、その後妊娠を理由に退職)。

回答者が、新しく家庭を築く場として千里NTを選択した理由を把握するため、入居経緯をたずねた。ケースA、Hは、以前よりも広い住居を求め、団地に申し込んだ。ケースB、E、Fは、夫婦または家族で住むための住居を探していた。千里NTを選択した理由は、夫または妻の勤務先との距離が適当であったためである。ケースC、Dは、妻に無断で夫が申し込んでいた。特にケースCは、婚約時に団地に当選したため、半年近く結婚の時期を早めた^{注8)}。ケースGは、仕事が忙しく、帰宅後の入浴が困難だったため、浴室がある公社団地に申し込んだ。全体の傾向として、夫の通勤の利便性や夫の要望など夫の都合で、千里NTへの入居を決めていた(6件/8件中)。

4. 1960年代における団地暮らしの記録

4.1 住み方調査の結果

1次調査における住み方調査の結果を以下①～⑨に要約する。また家具などの配置については図2に記す。

- ①団地入居時に、DKにダイニングセットを配置し、食事をするようになった。居住者は暮らしの中に「食寝分離」を取り入れていた。
- ②和室6畳間を寝室とし、布団で就寝した。また、同じ6畳間にテレビと座卓を配置する家庭もあり、居間兼寝室として使用された。
- ③夫は仕事が忙しく帰宅が遅かったため在宅時間は短く、夫の専用空間は確保されていなかった。
- ④いずれの回答者も和・洋ダンス、整理ダンス、下駄箱、鏡台などのいわゆる婚礼家具は必ず保有していた。
- ⑤団地の間取りの特徴として、開口部が多く壁面が少なかった。そのため、居住者は家具(特に嫁入り道具であるタンス等)の配置に困り、一部の開口部を閉め切り壁面を確保し、家具を配置した。
- ⑥洋風生活に憧れていたものの、実際にソファセットやベッドを暮らしに取り入れた家庭は少なかった。
- ⑦1950年代後半に「三種の神器」と呼ばれた白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機などの電化製品は、全世帯が保有していた。
- ⑧府営団地には浴室がなく、居住者は銭湯に通った。しかし、1963年に簡易型ユニットバス「ほくさんバスオール」^{注9)}が発売されて以降、各戸がこれを購入し急速に普及した。
- ⑨公社団地には浴室が設けられていた。浴槽は備え付けでなく、入居者が購入し、浴室に持ち込んだ。浴槽は木製が主流であった。

4.2 DKの課題と住み方の工夫

2次調査で用いた暮らし再現模型と展示室の様子を写真1、2に、

表1 調査の概要

	1次調査		暮らし再現模型の製作	2次調査	
	①聞き取り調査	②住み方調査		③模型展示による聞き取り調査	
調査目的	暮らしの記憶の収集、模型製作のため			暮らしの記憶を収集するため	
調査期間	2012年7月24～9月7日			10月13日～11月25日 毎週月曜日を省く	
調査時間	1h～1h30m グループor個別	1h～2h 個別		随時(9:30～17:15) 1人あたり10m～20m程度	
調査人数	3～5人	1人につき 1～3人		1～2人/日	
使用ツール	写真、文献 図面、配色カード、 文献、メジャー			模型	
有効回答数	8世帯	5世帯		90件	

表2 1次調査回答者の基本属性

ケース	性別	子供の人数	入居時					妻の就労
			居住地	団地種類	入居年	年齢	家族構成	
A	女	2	佐竹台	府営	S37	32	夫婦+子(2)	無
B	女	2	佐竹台	府営	S37	31	夫婦+子(1)	無
C	女	2	佐竹台	府営	S37	21	夫婦	無
D	女	2	津雲台	公社	S38	25	夫婦+子(1)+祖母	有
E	女	3	青山台	公社	S40	29	夫婦	有
F	女	2	青山台	公社	S40	22	夫婦	無
G	男	2	藤白台	公社	S39	30代	夫婦+子(1)	無
H	男	2	佐竹台	公社	S41	32	夫婦+子(2)	無

図1 調査で入手した資料と製作した暮らし再現模型の内部

に棚を手作りし、収納スペースを確保した。特にケース E は、なんとか生活用品の収納場所を確保しようと、本来収納スペースではない部分を使用し、また、業者に依頼して簡単なリフォームもした。

以上のように、入居から数年の間に団地の住戸内には、多くの耐久消費財が配置された。文献 5 で記されているように、団地の狭小空間に大量の耐久消費財を入れたことは、家庭内事故を引き起こす要因にもなり、一時は社会問題となった。この責任の一端は、暮らしを考慮せずに、消費者の購買意欲を煽った供給側にあるものの、住生活に関する情報不足や団地居住者自身の知識、経験不足が招いた事態であると考ええる。しかし、その一方で、収まりきらない生活用品を収納するため、居住者は棚を作製するなど、努力していたこともわかった。

4.4 居室の維持・管理

居室の維持・管理に関する暮らしの記憶を表 4 に記す。

団地の DK などの床材には板材が採用された。しかし、板材の床は冷たく寒いため、居住者はその上に絨毯を敷いた。また、板の間は大切に扱われ、居住者は定期的にワックスをかけるなどしていた（ケース C、20、E、F）。

加えて、団地は開口部が多く、特に玄関からは隙間風が入り寒かったため、ケース E のように業者に依頼し、玄関内側に扉を設置する家庭もあった。建具に関しては、建付けが悪くなるなどの劣化により、居住者によって手入れされたケースもあった（ケース 23～25）。

さらに、ケース C、E は、妻側住戸に居住していたため、結露により家具の背板や押入れの腐食が顕著であった。居住者は背板を張り替え、押入れにはビニールや段ボールを敷き湿気防止対策を施した。

以上から、当時は団地の建物自体に、断熱・湿気防止対策が十分にされておらず、居住者は断熱性能が悪く、不衛生になりがちな住環境の下、暮らしていたことがわかった。しかし、居住者は住宅供給側に頼らず、自らそれらに対処し、衛生的・健康的な暮らしを確保するために、各々工夫していた。

4.5 団地住戸内における水回り設備の使い方

団地の水回り設備に関する暮らしの記憶を表 5 に示す。

府営団地において、バスオールの設置は、給排水を考慮してバルコニーに置く場合（ケース C、26、28～31）と、バスオールは家具であるため住戸内に置く場合（ケース B、27、32、33）があった。前者の場合は、入浴時外部から見えてしまうため、よしずでバスオールを囲っていた。また、ケース 31 は「バルコニーで排水すると、虫が発生した。」と回答し、衛生面で問題があったことがわかった。

公社団地には、浴室が配置され、居住者は各々木製の浴槽を配置し使用した。当時は、浴室が配置されている住宅は少なく、帰宅の遅い男性は、入浴の機会を逃すことがしばしばあった。そのため、ケース G、H は、浴室のある公社団地に当選し、「嬉しかった。」と回答した。一方で、先駆的だった浴室の配置だったが、ケース E は、「浴室の壁はコンクリートで、よくカビが発生した。」と回答した。また、脱衣所はなく、居住者は DK や玄関のそばで着替えた（ケース 39、40）。加えて、ケース E、41 は「当時は浴室扉も木製ですぐに腐敗した。」と回答し、自ら浴室扉を修繕した。さらに、バルコニーに風呂釜があり、ケース 37、43 は「風呂釜には、温度調節機能がなく、お湯が熱くなりすぎて事故が起きることもあった。」と回答した。

「三種の神器」の一つであった洗濯機は団地に普及したが、団地

表 4 居室の維持・管理

ケース 分類	住戸形式 (入居年S)	居室の維持・管理
C	▲ (37)	板の間は、一年に一回家具を動かし、ワックスがけした。
20	▲	板の間に絨毯を敷き詰める時は、家族総出で家具を移動させた。
E	△ (40)	洋間の絨毯は業者に買って敷いてもらった。DKは既製品を購入し、部分敷きした。家具をどけるのが大変なので、入居時、家具を入れる前に敷いた。
F	△ (40)	板の間は冷えるので、絨毯を敷いた。洋間は業者に依頼し、部屋の寸法を測って、きっちりと敷いてもらった。ダイニングには、既製品の絨毯を敷いた。たいていの家は、既製品の絨毯を敷いていた。
21	◆	室の使い方がわからない3畳間の空間があった。
22	▲	鉄のサッシは錆びていたため、開閉時にすごい音がした。
23	▲	行商が障子紙、襖紙を売りに来ており、年末に張り替えた。
E	△ (40)	玄関は、隙間風が入り寒いので、業者に依頼して内側にもう一枚扉を付けた。通常はカーテンを吊るす家が多かった。
24	△	窓枠やベランダの欄は鉄製で、赤茶色だった。錆びるためサビ止めを塗った。
25	—	襖をよく開閉したのですり減って簡単にはずれるようになった。その都度、釘を打ったり、薄い木を敷くなど、修理をした。
G	▲ (37)	一番端っこに住んでいたので、湿気でカビなど家具の背板が全部だめになった。
E	△ (40)	東側の端っこに住んでいたため、湿気でカビが発生した。家具のベニヤ板によくカビが発生したので、何回もカビをとり塗りをなおした。また、押入れの壁面も湿気で、ベニヤ板になったため、段ボールやビニールなどを敷いて、モを収納していた。

表 5 団地住戸内における水回り設備

ケース 分類	住戸形式 (入居年S)	団地住戸内における水回り設備
A	▲ (37)	「バスオールは使用しないように」と府から言われた。しかし、銭湯は営業時間があるので、夜遅く帰宅する学生や夫が入浴できなかった。住民の不満が募り、問題となった。
C	▲ (37)	バスオールを購入する前は、子どもが泥だらけで帰宅したら、洗濯槽の中で行水させた。銭湯には、入浴時、赤ちゃんの面倒を見てくれる人がいた。
26	▲ (37)	バルコニーにバスオールを配置した。バルコニーの扉が外開きのため、バスオールの入り口は外向きにした。入浴時、外から丸見えになるので、カーテンやよしずをつけ、見えないよう工夫した。住戸内にバスオールを配置する人もいた。
27	▲ (40)	入居当初は浴室がなくてよかったが、子どもができたらやはり必要だと思い、バスオールを購入した。玄関近くの板の間に置いて使った。バスオールは当時、高級品だった。
28	▲	バルコニーの扉からすぐ入れるよう、バスオールは住戸に向けて設置した。入り口は見えないように、よしずで囲った。
29	▲	浴室がなかったため、バルコニーにバスオールを配置した。
30	▲	洗い場付きバスオール三代目目黒くさんバスオールをバルコニーに置いていた。
31	▲	バスオールはバルコニーに設置した。しかし、排水すると湿って虫が発生した。
32	▲	バスオールは家具扱いだったので、家の中に置いていた。
33	▲	バスオールは、キッチン隣の和室にビニールシートを敷き、その上に置いていた。そのため、部屋が狭くなり大変だった。
34	▲	我が家のバスオールは意図的に置いていた。
35	▲	バスオールは、水漏れ等(排水時も含め)トラブルが多かった。
36	*1	当時、一般住宅にも浴室がなく、府営団地に浴室を設けることに批判が多く、なしとなった。近隣センターに銭湯業者を呼んだが、バスオールが普及し利用者が減り、廃業した。
E	△ (40)	入居時、浴槽は各自で購入した。浴室の床には「ローカ」があり、その上にスノコを敷いた。わりと底が深いので、近所では体重に耐えられず、スノコに穴が開くという事故もあった。台所の沸湯かし器から浴室まで、シャワーを引っ張っていた。長いホースのついたシャワーが販売された。しかし、ガス中毒を起こす事故が発生し、ガス会社から禁止された。浴室の壁は、むき出しのコンクリートで小さな窓しかないのので、よくカビが発生した。浴室扉は、木製だったが、木が朽ちるのですぐにアルミ製に変わった。
G	△ (39)	仕事で忙しく、毎晩帰宅が遅かった。以前住んでいた所は、浴室がなかったため銭湯に通っていたが、帰宅後駆けつけたら、いつも閉店していた。「お風呂に入れる所に行きたい。」と思って一生懸命団地に申し込んだ。それで、やっと当選し、嬉しかった。
H	△ (41)	団地に入居して、各戸に浴室が付いていたのが一番嬉しかった。当時にしては、本当に珍しかった。また、団地にはDKもあり、ライフスタイルの革命だと思った。
37	△	お風呂のガス釜はバルコニーにあり、沸かすために外に出ていた。昔は、温度調節機能などなかったため、焚きすぎると、浴槽の湯が沸騰していることもあった。
38	△	団地はトイレ・浴室に窓があり、明るく換気もよく、開放的な感じがした。
39	△	脱衣室がなく、ダイニングが脱衣室代わりだったため、ダイニングテーブルを和室に配置する家もあった。浴室には、鏡と洗面台もあった。
40	◆ (37)	社宅には脱衣室がなかったため、入浴時、服は玄関近くで脱いだ。
41	◆	浴室の木製扉は、湿気ですぐに下部が腐敗したので、木を貼って、修繕した。
42	—	当時、浴槽は消耗品扱いだったため、入居者は各自で持ち込んだ。
43	—	お風呂のガス釜は外にあった。下から熱い湯が沸きその上に銅版が敷いてあり、さらにその上に木の板が置かれてあり座れるようになっていた。昔は、温度調節機能がなかったため、焚きすぎたお湯に落ちて、火傷をする事故もあった。
44	*1	賃貸公社団地の浴槽は最初は設置されておらず、入居者がガス会社や風呂屋と相談し、購入した。5、6年前(2006年ぐらい)より、最初から設置されるようになった。
A	▲ (37)	子どもがいると洗濯物が多いので、入居時洗濯機を購入した。洗濯機はバルコニーに配置したが、冬は凍ってしまい、水がでなかった。
E	△ (40)	団地は2戸でひとつの排水口を利用していたため、詰まると住民間トラブルの原因となった。私の家は、1階だったため、外から回って掃除することができた。
H	△ (41)	洗濯機は、使用する度に長いホースを浴室まで伸ばし、給排水をおこなった。洗濯が終わると水を出しながら、ホースを巻き取り、収納した。洗濯機の水も排水は全て浴室でおこなった。浴室の排水口は、排水が流れていくのが見え、だんだん汚くなり嫌だった。洗濯機の洗剤のカスなどが溜まり、不潔だった。
45	△	団地の間取りには、洗濯機置き場がなかったが、洗濯機を購入する家庭は多かった。給排水の関係で、バスに洗濯機を配置する家庭が多かった。しかし、糸くずや洗剤の灰で、排水口が詰まってしまう、問題となった。特に、上階の住民は、排水口が詰まると、雨水が流れないので、困った。
46	◆ (37)	浴室の洗い場が広がったので、浴室に洗濯機を置いていた。
	◆ (37)	洗濯機をバルコニーに置いていたため、日光が当たりすぐに変色した。洗濯時はポンプを使い、窓を通して浴室から洗濯機に水を入れていた。

【住戸形式】 府営団地:▲、公社・公団団地:△、その他集合住宅(種類不明):◆、不明:—

*1は、かつて千里NT、または団地の開発に携わっていた者

※暮らしの記憶は来館者との会話の記録から抽出したため、【住戸形式】が不明の場合もある。

の間取り計画には洗濯機置き場が想定されていなかった。府営団地に住むケース A、B はバルコニーに洗濯機を配置した。ケース C は、バスオールをバルコニーに配置したため、洗濯機は住戸内に配置した。バルコニーで排水すると、洗剤のカスや糸くずが頻繁に詰った。当時、団地のバルコニーは、二住戸で一つの排水口を使用していたため、それが住民間トラブルの原因にもなった。公社団地において、ケース E、F、45 は、住戸内に洗濯機を配置し、浴室で給排水を行った。そのため、ケース E は、「浴室の排水口に洗剤のカスなどが溜り不潔感があった。」と回答した。また、「洗濯機は使用する度、ホースを用いて給排水するため、大変だった。」と回答し、女性の家事労働軽減のために開発された家電製品であったが、当時の間取りは、家事空間に対する配慮が少なく、効率よく、衛生的に洗濯機を利用するためには課題があったことが明らかとなった。

以上から、当時、バスオールや洗濯機は、設計者の予測をはるかに上回るスピードで団地内に普及し、団地の間取りが対応できていなかったことがわかった。居住者は狭い居住スペースの中で、給排水の場所を考慮してバスオールや洗濯機を配置することを余儀なくされた。また、浴室にカビが発生する、扉が腐敗する、排水口に洗濯時のカスが溜まるなどの問題から、浴室を衛生的に保つためには、定期的に手入れする必要があることが明らかとなった。

4.6 団地コミュニティの形成過程

両調査では、団地の住み方の他に、多くの団地ならではの、1960 年代ならではの暮らしのエピソードを収集することができた(表 6)。

特筆すべき点として、団地コミュニティの存在があげられる。ケース A、C、E、G は、「団地には子育て世帯が多く、近隣住民とは、子育ての過程で自然と仲良くなった。」と回答し、特にケース C、E は「階段室の居住者同士は、とても仲が良かった。」と回答した。一方、男

性であるケース H は、典型的な企業戦士で、仕事中心の生活をしてきたため、自治会活動など、まちでの活動に参加し始めたのは、定年間際になってからである。また、ケース G も「可能な限りコミュニティや子育てに参加するよう努めたが、やはり仕事が忙しく、参加は困難であった。」と回答した。

このことから、団地居住者は、子育てを通して NT 内・団地内でコミュニティを形成していたことが明らかとなった。また、女性の就労が少なかったことや、男性は仕事で多忙だったことなどから、団地の子育てコミュニティは女性中心で形成されたと推測できる。さらに、階段室でコミュニティが形成された要因としては、①団地の入居制度により、同世代、同程度の所得の住民が多かったこと、②子育て世帯が多かったこと、③団地にはエレベーターがなかったため、外出時、居住者は必ず階段室を利用したことなどが考えられる。

5. まとめ

本研究では、1960 年代の NT の団地における当時の最先端であった住生活に着目し、千里 NT を対象として、団地内における日々の暮らしの様子を新たに記録することを目的に、聞き取り調査、住み方調査を実施し、団地居住者から暮らしの記憶を収集した。

調査の結果、1960 年代の千里 NT における団地暮らしの記憶を収集し、その特徴を把握することができた。団地の間取りに適合しないにも関わらず、居住者が当時の憧れであった先進的な暮らしを積極的に持ち込んでいたことや、団地の建物自体も現在と比べると温熱環境の性能が劣り、団地暮らしには不便な部分も多かったことが明らかになった。「生活革新」「消費革命」により家庭内における耐久消費財の急激な増加は、団地設計者の予測をはるかに上回り、日々の生活の中で、種々の問題を誘発した。特に、団地の水回り設備計

表 6 団地暮らしのエピソード

ケース	分類	住戸形式 (入居年S)	団地暮らしのエピソード	ケース	分類	住戸形式 (入居年S)	団地暮らしのエピソード
G	交通機関	△ (39)	入居当初、北千里の道路は舗装されておらず、長靴を履いて通勤した。会社に靴を置いておき、出勤時に履き替えた。それが嫌で、自家用車を欲しがることが多かった。	E	ゴミ捨て	△ (40)	入居時は、ゴミはダストシュートに落としていた。でも、ゴミ袋がバケルして、悪臭が漂ったため、すぐに使用禁止になった。
E	制度	△ (40)	入居当初は電車が南千里までしか開通しておらず、自宅がある北千里までは、バスを利用した。朝は通勤のため、バスが満員になり、何本も見送った。イライラした。	49	ゴミ捨て	◆ (42)	ダストシュートがあった頃は、ゴミ箱に入らずで、キッチンから出た生ゴミすぐに捨てられた。しかし、夏は悪臭がひどく、分別せずに捨てていたので、割れたカラスやビンでゴミ収集員が怪我をしたこともあった。
47	制度	▲ (42)	姉弟の寝室が同じではよくないというので、申請すると優先的に引っ越しができた。	50	ゴミ捨て	—	入居当初はゴミを分別せず、何でも1つの袋に入れてダストシュートから落としていた。ゴミ収集員が上から落ちてくるゴミに当たり怪我をする事故もあった。また、ゴミ袋が破裂して中身が飛び出し、衛生面でも苦情が出て使用禁止になった。
48	制度	▲	階段室役員は当番制で、資源ゴミの回収、階段室の掃除等をしていて。当番は、玄関扉に階段役員のシールを貼っていた。	51	テレビ・ラジオ	▲	テレビを見ない時は、埃がつかないよう画面に綿帳のようなカバーをかけていた。
F	団地の家賃	△ (40)	団地の申込書には、落選回数記入欄があり、何度も落選すると当選しやすくなった。入籍前に団地に申し込むためには、結婚証明書を出さなければいけなかった。	F	テレビ・ラジオ	△ (40)	テレビには、レースのカバーをかけていた。カバーは、自分で作った。チャンネルを回すダイヤルも大きかったが、画面はすごく小さかった。
A	団地の家賃	▲ (37)	以前住んでいたアパートは、1DKが1900円/月、2DKが2600円/月だった。ところが千里NTは2DKが5800円/月だった。お金持ちしか入れないという感じがした。	52	テレビ・ラジオ	△	ラジオはどここの家庭にもあった。また、黒電話の下には必ずレースが敷いてあり、受話器にもレースのカバーをしていた。
E	団地の家賃	△ (40)	当時、家賃が高く、私の給料分ぐらいを家賃の支払いに充てていた。	53	テレビ・ラジオ	◆ (31)	当時テレビはワイドスクリーンという画面を大きくするものをつけていた。放射能除けにもなったそう。大きく存在感のあるテレビもあり、高級品だった。
F	団地の家賃	△ (40)	入居当初は、主人の給料が3万円で、その内9450円を家賃として支払っていた。家賃と光熱費でお金が残らなかった。私は結婚を機に退職したが、団地に応募した時は、申込用紙に夫婦の給料を足して記入した。	54	テレビ・ラジオ	—	テレビのアンテナは住戸ごとに1つずつつけられていた。台風がくるとアンテナ同士が当たり、向きが変わるとテレビの映りが悪くなった。父がそれを修理していた。
G	団地の家賃	△ (39)	団地の家賃は高く、僕の給料と見合わない家賃だったが、それでも入居を決めた。	55	テレビ・ラジオ	—	テレビは高級品で、カバーをかけた。地震というと、父親はテレビを抱えて逃げた。
H	団地の家賃	△ (41)	今でも覚えているが、当時、文化住宅の家賃が6000円だったのに対して、千里の団地は1万円もした。生活していけるか不安に思った。だけど、新しい生活文化に対する憧れや、家族が増えるので家庭を安定させたいと思ったので、入居した。	56	調理家電	▲ (37)	ガスオーブンを購入し、よくパンを焼いた。焼いたパンは、近所によくおすそ分けした。
A	団地コミュニティ	▲ (37)	以前は玄関扉を開けていたら井戸端会議が始まった。バーベキューしたり、隣近所みんな仲良しだった。「ちょっと、お醤油貸してね。」とかは日常茶飯事だった。おむつを代えたり、ミルクを飲ませたりと、隣人がよく子どもの世話をしてくれた。	57	調理家電	◆ (48)	つわりがひどかったため夫がジュサーを買ってくれた。後片付けが大変だった。
C	団地コミュニティ	▲ (37)	階段室で仲がよかった。産後、両親援助を受けられなかったが、隣の奥さんが、一週間ほど、私の代わりに子どもを沐浴させてくれた。	58	調理家電	—	ジュサーで作ったほうれん草のジュースは不味かった。
D	団地コミュニティ	△ (38)	子どもが泥んこになって帰ってきた時、Bさん宅でお風呂に入れてもらった。	59	調理家電	—	昔の冷蔵庫には冷凍庫がなく、氷屋さんが氷を売りに来て冷蔵庫に入れてくれた。
E	団地コミュニティ	△ (40)	自宅に浴室が付いていたため、よくお風呂を貸してあげた。	60	洗濯機	—	ピラミッド型のトースターを使用していた。片面を焼いたら真ん中から開けてパンをひっくり返してもう片面を焼いた。両面焼きが出た時は活気だった。
G	団地コミュニティ	△ (39)	子どもが多かったので、(特に妻は)子どもを通じて、住民同士交流が持てた。仕事が忙しく、なかなか子どもと外出できなかったが、子どもは近所のおじさんにお花見や海水浴に連れて行ってもらい、可愛がられていた。	61	洗濯機	—	手回し脱水機を使っていた。右側にハンドルがあり、前から洗濯物が出てきた。
H	団地コミュニティ	△ (41)	入居当初は、コミュニティづくりなど考えていなかった。自治会も住友が入った。役員が回ってきたら、妻に行かせた。ほとんどの家がそうだった。	62	洗濯機	—	当時はまだローラーの脱水機を使用していた。
				63	洗濯機	—	二槽式洗濯機は便利だったと思う。でも、洗いから脱水への移動時は腰にきた。
				64	洗濯機	—	ローラーの脱水機を使うとヤヤグなどはしわになり、必ずアイロンをあてた。
				65	洗濯機	▲	バルコニーの半分を部屋に改造した。
				その他	—	△ (41)	団地は、同じ玄関扉がずっと並んでいるので、酔っぱらって帰宅すると、自宅を間違えた。よく、1つ下の階でジュサーを喝らしてしまい、あくる朝、妻に謝りに行かせた。
				66	その他	◆	電話は申し込んでもすぐにはつかなかった。つきだしたら、電話番号が順番で、近所に同じような電話番号の家があった。
							団地の階段室は狭く、引越の際には、クレーン車を使ってバルコニーから家具を入れた。

【住戸形式】 府営団地:▲、公社・公団団地:△、その他集合住宅(種類不明):◆、不明:— ※暮らしの記憶は来館者との会話の記録から抽出したため、【住戸形式】が不明の場合もある。

画に、家事労働に対する配慮が少なかったことは、当時の団地設計者の大半が男性であり、家事の担い手の視点が取り入れられなかったことが一つの要因であると考えられる。しかしながら、当時「団地族」と呼ばれ、“あたらしもの好き”と揶揄されることもしばしばあった団地居住者は、団地で暮らすうえで生じたそれら諸問題を改善するために、工夫を凝らしてそれらに対応し、楽しみながら団地を住みこなしていたことがわかった。また、1960年代に開発された団地ならではの当時の暮らしのエピソードも集めることができた。

なお、本研究では、団地暮らしについてある一定の傾向は把握できたものの、調査の事例数は限られていたため、団地暮らしに関する量的データは得るに至っていない。また、当時は、現代のように写真や映像などの記録媒体が大衆化されていなかったため、写真の提供も少数であった。今後、さらに多様な事例を収集するためには、調査を重ねていく必要があるといえる。

加えて、調査手法の再検討も必要である。本研究で実施した2次調査では、博物館展示室において、暮らし再現模型をツールに調査したことで、多数の来館者から暮らしの記憶を収集することができた。しかしながら、回答者の詳細な属性が得られなかったなど、課題があった。

以上のように本研究には種々の課題はあるものの、本研究で収集したような先人たちの暮らしの軌跡を記録、継承することは、次世代が住宅・まちに対する愛着や、豊かな住居観を育むうえで役立つ。そのため、人口減少・少子高齢化が課題である日本各地のNTにおいて、NT第一世代が健在であるうちに、住宅やまちにおける暮らしの記憶や暮らしに対する想いを記録していくことは重要であるといえる。

注

注1) 暮らし再現模型とは、住宅の内部を暮らしの様子とともに表現した住宅模型である。そのため、模型のサイズは通常よりも大きく、また、建築の住宅模型では作らないような生活用品なども製作し、さらに、暮らしをイメージしやすいよう、模型内には人形を配置し、調査結果をもとに架空の家族設定と暮らしの場面設定も作成する。暮らし再現型模型は、「暮らし」を伝えるツールとして、筆者らが考案した。

注2) 神戸女子大学家政学科梶木研究室では、2010年より大学が隣接する須磨NTにおいて、生活を立体的に再現するために暮らし再現模型の製作に取り組んできた。模型製作のために聞き取り、住み方調査により暮らしの記憶を収集し、調査で収集した暮らしの記憶を暮らし再現模型として「カタチ化」したことで、生活全体を表わすことができた。2012年、千里NTにおいて、吹田市立博物館が開催する特別展「ニュータウン半世紀展—千里発・DREAM—」に参加することとなり、筆者らは千里NTをフィールドとして、この取り組みを実施する機会を得た。本取り組みの詳細なプロセスについては、文献6を引用することとする。

注3) 2012年秋、千里NTでは入居開始50周年を記念して、様々な記念行事が行われた。吹田市立博物館秋季特別展「ニュータウン半世紀展—千里発・DREAM—」もその一つであり、市民実行委員の運営により開催され、展示の他にも様々なイベントが催された。開催期間は2012年10月13日～11月25日、会期中の入場者数は約7000人。

注4) 千里NT第一世代は、特別展の市民実行委員の協力のもと、自治会役員や市民活動参加者などを中心に選定した。調査において、千里NT第一世代を探すことは困難であったが、市民実行委員や自治会役員を介して、複数の千里NT第一世代と話す機会が得られた。

注5) 住み方調査は、建設時の平面図に家具の配置を書き込み、配色カードを用いてあらゆる製品の色を確認した。あわせて、入居当初から所有して

いる家具の実測調査もした。

注6) 来館者との会話は、一人当たり10分～20分程度。暮らし再現模型と来館者自身を知る（体験した）団地暮らしとの類似点や相違点、具体的には模型内の家具・家電製品、生活用品などの所有状況や配置、使用方法、家族との暮らしのエピソードなどを聞き出した。

注7) 2次調査の回答者の属性について、回答者が居住していた住戸形式を、可能な限り結果の表中に示す。しかし、暮らしの記憶は来館者との会話の中から抽出したため、不明な場合もある。本来ならば、不明のデータは割愛すべきであるが、これらも貴重な暮らしの記録となるため、筆者らが当時の団地暮らしについて言及していると判断したものについては、結果として記している。

注8) 千里NT入居開始当初、団地には単身世帯は入居できず、必ず結婚していなければならなかった。入籍前に入居を申し込む際は、夫婦の父親と仲人の署名捺印、及び挙式の日取りが記入された結婚証明書を提出した。

注9) 簡易型バスユニット「ほくさんバスオール」は、1963年に63,000円で販売された。ガス湯沸かし器・排水ホース・シャワー・浴槽・ふた兼用の洗い台・タオルハンガー・石鹸置き・鏡・照明が付いていた。価格はサラリーマンの「給料1ヵ月分」を目安に設定され、浴室がなかった府営団地で急速に普及した。しかし、1980年代後半から千里NTの府営団地では浴室等の増築工事が始まり、バスオールの需要は減少した。メーカーによる製造販売は、2006年に終了している。

初代ほくさんバスオール

参考文献

- 1) 鈴木成文：住まいの計画・住まいの文化—鈴木成文住居論集一，彰国社，pp. 77- 100, 1988. 11
- 2) 広原盛明，竹本俊平，松原徹雄：ホワイトカラーの家族生活・個人生活とDKプランにおける住み方，日本建築学会論文報告集，第170号，pp. 61- 70, 1970. 4
- 3) 広原盛明，竹本俊平，松原徹雄：ホワイトカラーの家族生活・個人生活とL型プランにおける住み方，日本建築学会論文報告集，第171号，pp. 61- 66, 1970. 5
- 4) 青木俊也：再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし，河出書房新書，2001. 5
- 5) 渡辺光雄，高阪謙次：新・住居学—生活者視点からの9章—，ミネルヴァ書房，pp. 77- 78, 1989. 7
- 6) 梶木典子：大学生によるニュータウン第一世代の暮らし再現模型製作活動，住宅会議88，pp. 34- 37, 2013. 6

[2014年6月17日原稿受理 2014年8月22日採用決定]

特別展のポスター